

1999年7月8日 富良野

TVドラマで知れ渡った「北の国から」のロケ地に向かう観光バスの多い布部川沿いのアスファルト道路をやり過ぎて、砂利道の布礼別川林道に入る。例によって妻も前方の蝶影を見逃さないような運転で進んでくれる。やがて湿り気のある路面で吸水する複数のコムラサキに会う。あまり気乗りはしないが、妻が「せっかくだから採ったら」と勧めるので降りて1頭をしとめる。三角紙に納めて車にもどろうとしたそのとき、車より後方の路面にオオイチモンジが舞う。この絶好のチャンスをしっかりモノにして車にもどるや「私のゆうことをきいたおかげよ」とやられる。

どんどん進んでやや明るく開けた場所の向こうに長い木陰が続く沢沿いの林道に近づいたそのとき。木陰がはじまるすぐの路面にひとときわ白帯が目立つオオイチモンジがいる。♀である。すぐにネットをかぶせたらまちがいなく採れるタイミングだったと思うが、これこそVideo撮影の対象だ、との考えが優先。その準備にかかった矢先、夢中で吸水している限りそう簡単には飛び立たないだろうと勝手に思ったのとは裏腹に、突然飛び立って沢沿いに遠ざかる気配。あっけにとられてVideo撮影を忘れてネット片手に走り出す。オオイチモンジはネットをどのタイミングで振ろうかとの当方の迷いを見透かしたかのように、身体のごく近くの旋回もふくめて滑空を繰り返したあと、急速に周囲の樹林めがけて高度をあげ、日当たりのいい梢むけて飛び去ってしまった。旋回の段階で勇気をもって振りぬけばネットインできたかもしれない、など、後悔をすればきりのないやしい時間ではあった。強がりというすれば、♀であっただけに、卵をたくさん産んで、次の機会への楽しみを増やしてくれるにちががなく、採れなくてよかったかもしれない、と。

この日は富良野のラベンダーや美瑛の広大な風景もみてから小樽まで移動しなければならぬ状況下、さらに奥へと探索した時点で、妻は先ほど逃した新鮮♀をなんとかしとめさせてやりたいと思ってくれているらしく「もう少しねばっていいよ」と最初の路面に戻る。そこで黒っぽい蝶が目に入り「降りてみたら」と勧めてくれる。やや大型のミスジチョウだとわかり、もうネットインする対象ではないのでもどろうとしたそのとき前方湿地でオオイチモンジがヒラリと舞う。きわめて新鮮な♂である。路面上で吸水態勢に入り静かにおちつくのをまってゆっくりネットをかぶせてゲット。「またしても私のいうことをきいたおかげでしょ」「ハイハイ、感謝々々ですよ」



June 8, 1982 上高地産



990708 富良野布礼別川林道

2007年7月12日 大雪湖

大雪湖の近くまでくると、明らかにオオイチモンジとわかる飛翔が車窓を横切る。木陰に車をとめてネット片手に降り立つと、周りには食樹のドロノキの大木があり道路と平行にとんでくるオオイチモンジがみえる。明らかにそれとわかる水溜りがあるわけではないがチョウは砂利道を転々と旋回しては静止する。新鮮オスである。オオイチモンジは吸水中にネットをかぶせても動じることなく吸水しつづける驚異的な鈍感さを示すという記事を読んだことがあるが、必ずしもそうではない。タテハ属のチョウにネットをかぶせたとき、採集者のとる常套手段はネットの底（先端）部分を持ち上げて上部に空間を作る。そうして自然に上の空間部へと移動するチョウをピンセット利用で三角紙に回収する。これが一般的手法なのだが、オオイチモンジにはこの方法が通用しないのだ。夢中で吸水をしている場面でも記事のような状況もあるだろうが、わずかの湿り気を求めて静止しているオオイチモンジを相手とした筆者の経験の多くでオオイチモンジは実に頭がいい。ネットをもちあげてできる上部空間には目もくれず、地面とネットの間に少しでも脱出できる隙間はないものか、と地面を離れることなく鋭く羽ばた



200712 大雪湖 オオイチモンジ♂



きながら動き回るのだ。今年は、愛山溪、大雪湖、石北峠、丸瀬布と、実に 4-5 回はこの動きとの戦いで、狭い空間で動き回るためきれいな鱗粉がはがれ落ちないように、ましてや羽が汚損しないよう、このチョウの回収には手を焼いた。

July 13, 2017 : 最終日も富良野布礼別川林道へ

昼食タイムのあと、オオイチモンジの再飛来を期待してもどった奥の湿地帯で、ようやく表れた個体は、午前中に目撃したメスと同個体だと思われ、湿地帯の手前でヒラリと滑空したあと、かなりの速さで流れる溪流の対岸へと飛び、やがて向こう側の溪流沿いで吸水しはじめる。急な流れの溪流は深い部分もあるようだが、上流側へ行けば浅い部分があることを確認し、オオイチモンジから目を離さないようにして靴をぬぎ、靴下もぬいで裸足となる。川原一面にころがる大小の石表面が強い陽ざしで熱く、裸足での移動はつらいがオオイチモンジが少しずつ吸水場所を変えていくのを見逃さないよう注意しながら溪流へと踏み込む。苔むした川底の小石まわりは滑りやすく、速い流れに足をとられそうになるのに耐え、ビデオカメラを落とさないようゆっくりと対岸に渡る。



オオイチモンジはやや落ち着いた様子で湿地面にストローを伸ばしている。驚かさないように遠回りで徐々に接近し、ズームアップでとらえられるあたりからビデオ ON で迫る。やはり新鮮度がかなり低い、白い帯が広いメス個体を身近にみるのは初めてでうれしくなる。オス個体には出会えなかったものの、今回の主目的をかりうじて達成できたことに感無量。